

地域のニーズを引き出す取組

～「郷学官」^{ごうがくかん}共同企画を通じた森林林業の普及～

南信森林管理署 伊那森林事務所 森林官 ○井元 幸子
信州大学 農学部森林科学科 3年 松村 泰代
〃 細川 奈々枝

要 旨

地域へ森林林業の重要性を普及する立場から国有林と地域の関係について現状を見つめ直し、課題を解決する手法を実践・検討しました。当事務所管内における課題は、地元集落と大学生と国の三者（郷学官）に活発な交流がないことです。コーディネーター（森林官）による情報収集をふまえて地元イベントに森林ガイドが同行する企画を共同で実践しました。これを通じ地域のニーズが引き出され、交流の活発化に一定の成果を得ました。

* * *

はじめに

人に何かを伝えるためのプログラムを作るときは、対象者のニーズを探ることが重要です。対象者のニーズに向き合った上で自分の伝えたいことを織り込むように計画することで、より多くの人にものを伝えられるという可能性が高まります。相手やそのニーズを理解しようとする努力抜きでは、耳を傾けてくれる人が少なくなりかねません。かといって、相手のニーズに従うばかりになってしまうと、大切なことが伝えきれないままになってしまいます。例えば、小学生が聞くのに、専門用語が飛び交う長い話では心に残ることは少なくなってしまうでしょうし、逆に喜ばせようとするあまりゲームに終始しては何が大切だったのか忘れてしまいます。

森林管理署は、より多くの人に森林林業について正しい理解を求めなければなりませんので、対象者のニーズに向き合うという基本にそって、課題の解決に取り組みました。

1. 目的と課題

取組を行った場所は、長野県伊那市にある手良沢山国有林の流域です。(図1)に示すとおり、この国有林には川をはさんで信州大学の演習林が隣接しており、下流には手良地区があります。

本取組では、地元の手良地区を「故郷」という漢字を元に「郷」と表し、大学生を「学」、森林官を「官」とし、3つをあわせて「郷学官」と呼ぶことにしました。課題として取り上げるのは、この郷学官の関係です。手良沢山国有林は、市街地から車で30分圏内というアクセスの良さから、地域との交流に活用しやすく森林林業の普及に活かしていくことを期待されています。

しかしこの目的に反し、地域の顔とうたわれている森林官は、地域で見向きもされていませんでした。

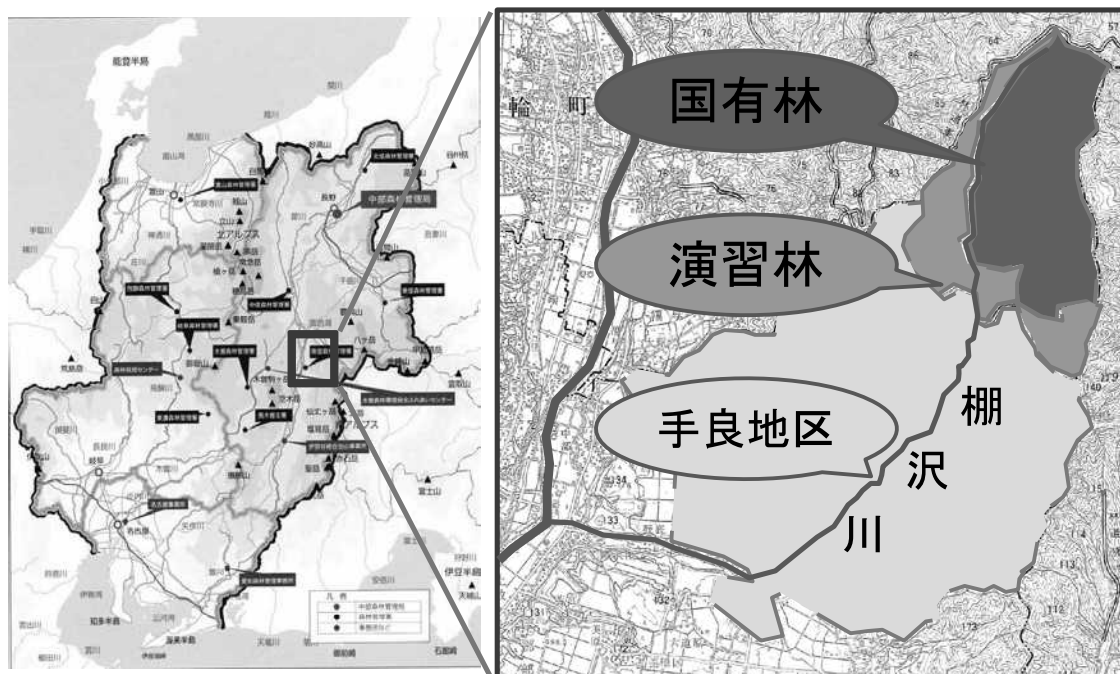
例えば、これまで育樹祭などのイベントが開かれましたが継続されている交流はありません。そこで、地区の小学校へ出前授業を宣伝に行きましたが、良い返事はもらえませんでした。

また、「地元の山を国有林に取り上げられたんだよ」という話を聞かされる事もありました。

一方、講義で森林管理署を訪れた大学生の後日談は、「あまり記憶に残っていない。え？あれが国有林だったの？」というものでした。

また、林野庁を敵視するに近いような認識をもった学生にも会いました。

このように、地区や大学生にとって国有林の存在はあまり身近ではなく、むしろ負のイメージを抱かれている場合もありました。こうした背景がともなった交流があまりないもしくは続かない状態は、地域に森林林業を普及させる役目を負った「官」の立場にあって課題であるにとらえ、これを解決するために新たな手法が必要であると考えました。



(図1) 手良沢山国有林と周辺図

2. 取組の目標と具体策

本取組の目標を、郷学官の交流を活発にすることに設定しました。そしてこの目標にむけて地域のニーズを引き出す新たな手法を提案し、森林林業の普及に役立てるものとししました。具体的には、郷学官が共同で一つの企画に取組むという手法を実践し、その有効性について検討します。

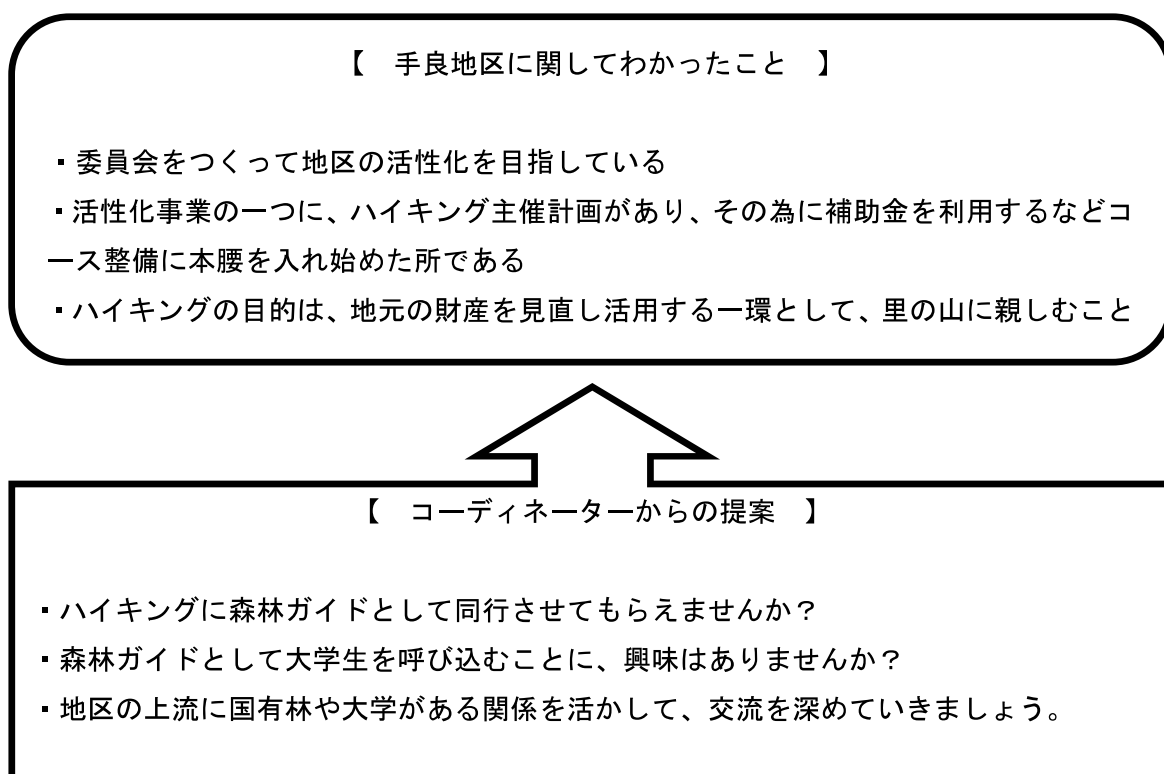
まず、森林官がコーディネーターとして地区や学生に持ちかけていく前に、今まで疎遠にしていた地区や大学生を動かすような企画を練る必要があります。そこで、地域では今何が求められているのかに耳を傾ける姿勢で情報収集を行いました。

3. 地域の情報収集と企画の提案

(1) 「郷」＝手良地区の情報

地区に関する情報は、業務で公民館を訪ねたときに話を聞いてみたり、当事務所へ用事があるて来る方に紹介をお願いするなどの方法や、公民館だよりや市報に目を通すなどの方法で集めました。

こうして得られた情報をふまえて、交流を深める「官」の関わり方を検討しました。地区で森林への関心を高めつつあることから、地区の活性化に水を差さないような、間接的な関わりが馴染むのではないかと考えました。(図2)

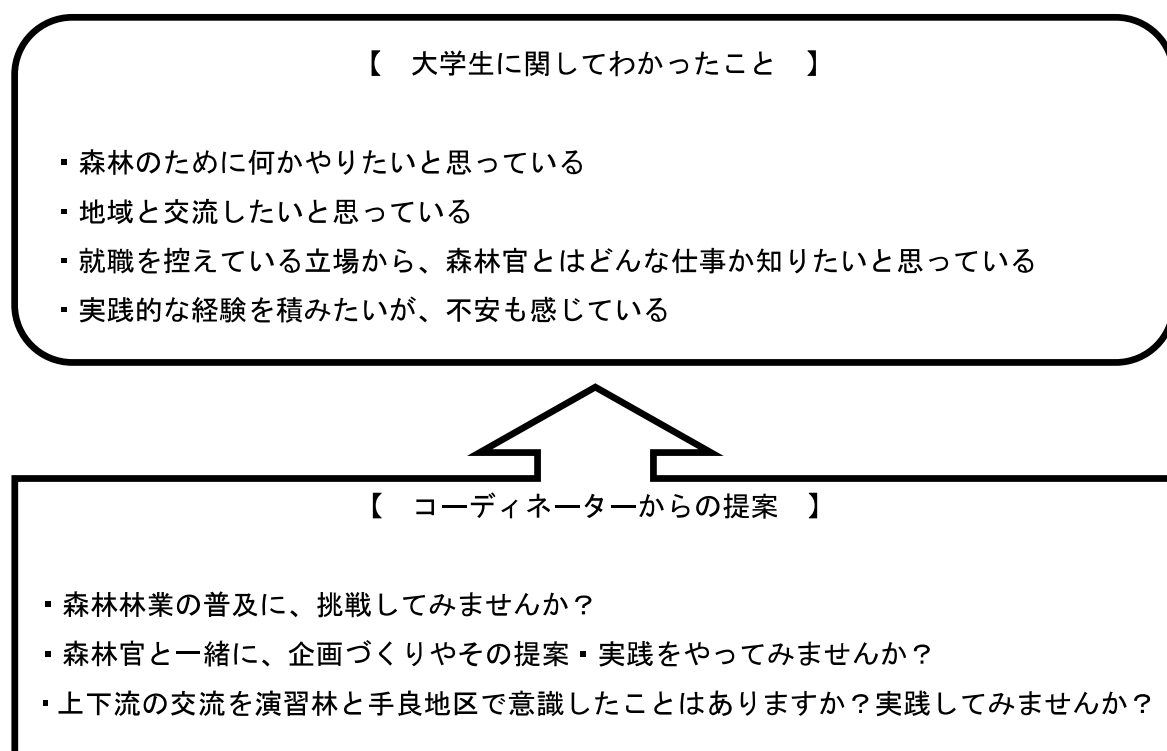


(図2) 手良地区の情報と提案の内容

(2) 「学」＝信州大学の学生の情報

学生の考えていることを聞きだせる機会を得るまでが、コーディネーターとして苦労した部分です。国有林に隣接している演習林事務所をたずね、そこへ立ち寄る先生と会って学生とつながるきっかけを探しました。学生と森林官は林道で度々すれ違っているのに交流がないのはもったいないという考えに先生も興味を示され、学生と引き合わせてもらうことが叶いました。その後、学生が森林事務所を訪ねてきてくれた時に、一緒になってどんな交流ができるのか考え、興味を持っていることなどについてやりとりをしました。

こうして得られた情報をふまえると、地域の人が喜ぶような実践の場を「官」が紹介できたら、興味を持たれるのではないかと考えました。(図3)



(図3) 大学生の情報と提案の内容

こうした働きかけの結果、郷学官の共同企画の方向が決まりました。それは、森林官と大学生が一緒になって森林ガイドに挑戦し、地区のハイキング計画がこれを受け入れるというものです(図4)。

郷学官という3者の共同にする理由は、地区が森林官を受け入れやすく感じてもらうために大学生＝若者を地区に呼び込めるというメリットが不可欠だと考えたからです。また大学生にとっては、森林官のサポートを頼りにして地域へ飛び込むことができます。三者の交流になってこそ、互いのニーズを満たしあえる関係になると考えました。そして大学生をいかに集められるかがこの取組のアキレス腱になります。



(図4)「郷学官」共同企画のイメージ

4. 森林ガイドに挑戦するまでの苦労とその成果

(1) 森林ガイドの準備

まずは、学生と森林官で下見を何度も重ねました。学生が自発的に仲間を誘って下見に出かけることもありました。コースのどこにどんな物があるのか、どこでどんな話をしたら参加者の皆さんに楽しんでもらえるのか考えながら歩きました。

また、コース整備にも参加しました。整備を主催する手良地区が樹名板を準備してくれ、その設置を学生にまかせてもらえました(写真1)。

準備中にできたアイデアを、主催者の手良地区に提案したりしました。集めた情報をしおりにして、ハイキングの参加者に配ったり(写真2)、ハイキングの昼食時間に参加者全体に向けて話をする時間も設けてもらえました。

それから、ガイドの仲間集めにも力を入れ、最初は2人だった学生も、当日は8人になりました。大学生のテスト期間や夏休み、インターンシップなど仲間集めに関する障害も多くあり苦勞しました。

こうした半年近い期間を経て、ハイキング当日を迎えました。



(写真1) 樹名板に書きこむ



(写真2) 当日、作ったしおりを配る

(2) ハイキング当日の様子と感想

地区の住民だけが対象のハイキングでしたが、参加者は小学生や主婦、年配の方まで幅広く集まり、約 180 人にもなりました（写真3）。主催者や参加者からの感想は「地元の山が新鮮に見えて楽しかった！来年も森林ガイドに来てほしい」と、好評をいただくことができました。そしてこの様子は、新聞や公民館報で紹介されました（資料1）。



(写真3) 森林ガイドも一緒に記念撮影

森林ガイドとして参加した学生の感想（写真4）

上流と下流の交流ということで、今回ハイキングに関わりました。立場が違くと人の思うことは色々あり、お互いの考えを伝えたり聞いたりするというのは案外難しいということを感じました。それと同時に、違う立場の人との交流の楽しさや面白さも知ったように思います。

ハイキング当日は、森林のガイドだけではなく、地元の人とおしゃべりもできて楽しかったです。私たち学生自身はもちろん、子どもから大人まで楽しんでもらえたのではないかと思います。



(資料1) 公民館報



(写真4) 学生のガイド風景

5. コーディネーターの役割

(1) コーディネーターとしてのはたらき

(ア) 学生のアイデアややる気をサポートする

この取組の成否は、学生の熱意をどれだけ引き出せるかに左右されます。

しかし学生にとってガイドは初めての挑戦であり不安の声も聞いていましたので、資料を使いながらアドバイスをし、森林官自身もガイドの準備から一緒になって挑戦しました。

また、学生だけでは準備に負担のかかる物質面もサポートしました。

(イ) 地区の関心を持続させる

下見に行くたび公民館を訪ねて、雑談も交えながらガイドの準備状況について話しました。その中で、ガイドの趣旨も伝えるようにしました。それはガイドとは名乗るものの実のところ学生主体の初めての挑戦なので、地区の皆さんには温かく見守る気持ちで受け入れてもらいたいということです。学生はものを教えるというより森林を楽しむ助けになりたいという気持ちや、逆に地元の人から昔の話を聞くなど交流を大切にしたいと思っていることなどを伝えることによって、外部から突然やってきた学生や森林官に対し、協力的な雰囲気が地区に広がっていき、ガイドの成功につながりました。

(ウ) 情報の共有化

情報は森林官に一番集まる形になっていたのですが、地区と学生のそれぞれにも共有するよう、伝達に努めました。

(エ) 活動結果の視覚化

準備風景など裏方の様子を撮影したり、ハイキング当日にカメラ係を配置するなどいろいろな場面の写真を撮りためておいて壁新聞を作成し（写真5）、取組の楽しさや苦労が目に見えるようにしました。仲間集めや地区住民の関心を引きつけることをねらったPR材料でしたが、署職員の関心も集めることになり、森林官自身のサポートを得やすい雰囲気作りにつながる効果もありました。



(写真5) 壁新聞と作成した学生

(2) コーディネーターとしての注意点

(ア) バランスの良い関わり方

コーディネーターはサポートに立ちますが、森林官の存在も印象づけるような、出過ぎず・控えすぎずといった関わり方になるよう気をつけました。

(イ) 継続性を念頭に入れたアドバイスを強調する

準備の段階から次の年も意識してもらえるようなアドバイスを心がけ、特にガイド実施後にいつのまにか解散してしまわないよう積極的に意識付けを行いました。その理由は、ここまでの郷学官の共同企画は現森林官の着想が原動力になってきた分、異動が原因で交流がまた途絶える恐れがありました。そこで、地区や学生にもある程度自発的な活動を促し、森林官が代わっても郷学官の交流が続く為にそれぞれの立場で考え取り組むように誘導する必要がありました。

6. 「郷学官」共同企画の成果

郷学官が共同で一つの企画に取り組んだことで得られた成果は、大学生の発想と行動力に助けられて企画の内容が底上げされ企画の魅力がアップしたこと、それをもってこれまで疎遠になっていた地区から、温かく受け入れられ、なおかつ来年以降への期待ももってもらえたことです。そして、取組を通じて森林官＝国有林の認知度とイメージもアップすることができました（写真6）。



(写真6) 学生と共同で作ったしおり

この成果によって、地域から様々な声が森林事務所へ寄せられるようになりました。

地区からは、来年もガイドをしてほしいことはもちろん、「上流の国有林で源流探訪してみたい」、「森林管理署で取り組んでいる獣害対策を応援しています」など、地区の上流にある国有林について関心が高まったと受け取れる内容です。

また、大学生からは「大学祭に森林管理署も出店して、他の学生とも交流を広げましょう」、「森林官に興味を持った人が増えたので、講演をしてほしい」など、身近な存在として国有林をとらえ、関心が高まったととれる内容です。

これらの声が寄せられるようになったことから、地域のニーズを引き出せたといえます。

7. 地域のニーズに応える

ニーズを引き出したら内容を吟味の上いかに応えるか、このことは今後に影響するため重要です。ニーズに応えたいいくつかを紹介すると、地区の猟友会と協力し獣害対策を行いました。学生の要望から、森林官の講演を行いました（写真7）。大学祭への出店は、署と手良地区の共同展示として行ったところ地区の見学者に大変喜んでもらえ、後日地区へも展示物を巡回させることができました。



（写真7）森林官の講演

こうして寄せられたニーズに応じていく内に、大学関連団体から「イベントのフィールドをほしい」という相談を受けることになりました。これまでは学生個々との交流だった為に、本取組のアキレス腱であった学生の参加者を集める力に弱さがありましたが、組織としての連携に発展できれば、この点を改善できる可能性があります。この段階にたどり着いたことで、交流が活発になってきたと言えます。よって、冒頭で取り上げた課題から、交流があまりない状態は解消できたと考えます。

8. 今後の課題

今後の課題として、交流が継続されないという課題に関する現状をまとめます。

交流が継続しにくい原因の一つに、活動を支える学生も森林官も数年で入れ替わってしまうことが考えられます。これを克服するために本取組の原点を振り返ると、ニーズが寄せられる段階にいたっても、郷学官の共同企画は交流を継続させる軸として重要性が高いことがわかりました。

なぜなら、地区で現在最も力を入れている恒例行事がハイキングであり、これまで集めた学生の情報と照らし合わせても、これに応える内容でもあるからです。

つまり、継続化にむけて解決すべき課題は、森林ガイドを継続できる体制づくりであるととらえられました。学生の確保に関しては、サークル活動と連動させる体制を学生が自主的に作ってくれました。下級生の中から次の代表者を選出して、学生側でも来年のことを考えてくれています。

また、ガイド内容の引継ぎについては、地区からもガイドを育てることを提案しており、一番必要な現地での引継ぎができる環境をつくるようにしています。

森林官は、こうした動きをつなぐ役割として今後もサポートしていく考えで、既に来年度に向けた取組を行っており、署との連携も図られてきています。このように、残された課題も郷学官の新たな共同企画として取り組み、現在の交流をより確かなものにしていこうと声を掛け合っているところです。

9. 考 察

実践の結果、その土地ならではの条件や情報を活かして検討された「郷学官」の共同企画は、地域のニーズを引き出す上で有効な手法であり、継続性については今後も努力が必要なものの引き出したニーズをとらえ応えていくことで交流を活発にすることができます。

ゆえに、森林林業を普及させるにあたって本取組の手法は有効であると考えます。



(写真8) 左から手良地区の公民館長、支所長、取組を支えた大学生の細川さん松村さん、森林官

おわりに

協力してくれた大学生の感想から、「国有林職員と直に接したこと自体が、林野庁をこれまでと違った視点で見ることにつながり得るものが多かった」という言葉をもらえました。

本取組はようやくかたちが見えてきたばかりの所ですが、より多くの学生に波及させられるようにしていくため、職員の皆さまの応援が今後必要不可欠です。

そして、ここまでの成果は手良地区の皆さまの熱意、大学生の熱意、大学の先生方の助力あってこそ得られた物です。コーディネーターである森林官自身が逆に助けられたと感じることもたくさんありました。ここまで繋がってきた交流を途絶えさせず、森林林業の普及に役立てられることを願います。

また、取組の中で気がついたことについて付け加えると、交流が私個人のものにすり替わらないようにし、森林官(=国有林)という存在への認識を高められるよう努力しました。

国有林と地域の関係について、当森林事務所の例では今後の展開を期待できる段階に入ったと考えていますが、「地域から必要とされる国有林」としてあるためには、さらなる努力が求められているとも感じました。国有林はどこかしら下流域を抱えているので、流域という視点でみれば本取組の手法は皆さまの地元置き換えて考えていただくことも可能と思います。対象者のニーズに向き合う努力と、国有林として伝えるべきことを織り込むことの大切さを忘れないでいただければ幸いです。

(参考文献「自然体験活動指導者手帳」 山と溪谷社 2002)